

銭形平次捕物控

十萬兩の行方

野村胡堂

青空文庫

一

「親分、飯田町の上總屋かづさやが死んださうですね」

ガラツ八の八五郎は、またニユースを一つ嗅ぎ出して來ました。
江戸の町々がすっかり青葉つぎに綴られて、時ほととぎす鳥と初はつがつを鰹が江
戸ツ子の詩情と味覺をそゝる頃のことです。

「上總屋が死んだところで俺の知つたことぢやないよ」

錢形平次は丹精甲斐もない朝顔なへの苗を鉢に上げて、八五郎の話
には身が入りさうありません。

「ところが、聞き捨てにならないことがあるんですよ、親分」

「上總屋の死に様が怪しいとも言ふのか」

「二年も前から癰ようを患つて居たつていふから、人手にかゝつて死んだとすれば、町内の外科が下手人見たいなもので——」

「落し話を聴いちや居ない、——何が聞き捨てにならないんだ」
平次は漸く朝顔から注意を外らせました。

「金ですよ、親分。上總屋音次郎が、鬼と言はれ乍ら、一代にどれほどの金を拵へたと思ひます？」

ガラツ八はなかくの話術家です。平次が滅多な事件に手を染めないのを知つて、かう乗出さずには居られないやうに持ちかけるのでした。

「五六萬兩かな、——有るやうでないのは何んとかだと言ふから、

精々三萬兩ぐらゐのところかな」

「さう思ふでせう。ね、親分」

「イヤにニヤニヤするぢやないか、それとも十萬兩もあつたといふのかい。こちとらから見れば十萬兩は夢のやうな大金だが、上總屋なら」

平次はガラツ八に焦^じらされると知つて、忌^{いま}々しくも煙草入を抜いて一服つけました。

「尤もこちとらに十萬兩もあつた日にや、あつしは早速十手捕繩と縁を切つて——」

ガラツ八の話は、また妙なところへ飛躍して行きます。

「金貸にでもなつて懷手で暮すつもりだらうが、さうは問屋が卸^{おろ}

さないよ」

「そんなサモしい根性ぢやありませんよ。先づ山ノ手の百姓地を五六萬坪買つて——」

「大きく出やがつたな、人にんじんごぼう參牛蒡でも作る氣になつたか」

「大違ひ、——親分に植木屋を始めて貰つて、あつしはそれを江戸の縁日えんにちへ持出して賣る」

「馬鹿だなア」

平次は仕様ことなしに苦笑をしました。そんな氣である八五郎の心根が哀れでもあつたのです。

「ね、親分。冗談は冗談として、上總屋の話だが、——誰でも一應は萬と纏まとまつた金があるに違ひないと思ふでせう」

「それがどうした」

「死んで了った後で、番頭や親類の者が、くまたかまなこ熊鷹眼で搜したが、不思議ことにあるものは借金ばかり。何萬とある筈の金が、たつた十兩もないと聞いたら驚くでせう」

「驚くよ、——お前の義理でも驚かなくちや悪からう、それからどうした」

「たつたそれだけだが、ちよいと變ぢやありませんか親分。神田から番町へかけて、並ぶ者のないと言はれた上總屋音次郎が、死んで一文もないなんぞ、ひにく皮肉過ぎますよ」

「搜しやうが悪かつたんだらう」

「そんな筈はありません。床下から天井裏まで搜したんださうで」

「それとも主人が死ぬと一緒に、誰か持出した奴があるのかな」

「熊鷹の眼が二三十見張つてゐる中から、きんちやく巾着一つ持ち出せ

るものぢやありません。まして千兩箱を五十も百も」

「よし、判つた。八五郎に揚あげ足あしを取られるやうぢや世話アねエ」

平次は苦笑ひをしました。

「そこで一つ、親分にお願ひがあるんだが」

「何んだい」

「上總屋の番頭さんに逢つて下さいよ」

「？」

「亡なくなつた主人は、何處かに金を隠してあるに違げえねえが、何人かゝつても見付かりさうもない。金が出なかつた日にや、後

の恰好がつかないさうです」

「で？」

「番頭さん、構はないから入つて來てくれ。お前さんから、親分に話して見るが宜い」

ガラツハは入口の方を振り向いて、大きな聲を出しました。

「それぢや、御免下さい」

靜かに格子を開けて入つたのは、二十三四のまだ若い男でした。地味な風をして居りますが、一寸良い男で何處か笑顔に人をそらさないところがあります。

「お前さんは？」

狭い家、初夏の風が吹き抜くやうに開けつ放してあるので、平

次は坐つたまゝで、客の物腰がよく見えます。

「上總屋の手代で、仙之助と申します。八五郎親分にお願ひして、主人の隠した金を見付けて頂かうと思ひましたが、八五郎親分は、錢形の親分さんにお願ひした方が宜いと仰しやるので、先刻さつきから門口を拜借して、お待ちして居りました」

若い番頭はそれだけの事を言ふうちにも、すつかり恐れ入つて、立て續けにお辭儀をして居ります。

「たからさが寶 捜しは困るよ、番頭さん」

「へエ——」

「上總屋の案内を知つた者が、幾日かゝつても解らないといふのに俺が行つたところで解るわけではない。そいつは岡つ引より易えきし

者^やへ行く方が早いぜ」

平次は寶搜しにまでコキ使はれる馬鹿々々しさが我慢がならなかつたのです。

「でも、それぢやお嬢さんが可哀想で御座います」

「お嬢さんが？」

「上總屋に金があればこそ、親類も知合もあの通り肩を入れてくれますが、何んにもないと判つたら、どうなることで御座いませう。それに折角^{まとも}纏りかけた縁談も、お氣の毒なことに駄目になります」

「縁談？」

「お嬢さんのお染^{そめ}さんは、たつた一人娘で、この秋には御武家方

から御養子が入らつしやる筈でございました」

仙之助の心配するのは尤も^{もつと}でした。主人が死んだ上、金が一文もないと判つては、武家の次男坊がわざ／＼町人へ養子に來る筈もありません。

「そいつは氣の毒だが、どうも俺は寶搜しに乗出すわけには行かねエ。いづれ分別人の上總屋のことだから、何處か容易に見付からないところへ隠してあるんだらう。お互に^ぬ抜け^が驅けの功名をする氣にならずに、多勢で手を分けて探して見るが宜い。五十も百もある千兩箱を、^{ふところ}懷^{たもと}へも袂へも隠せるわけはないから」

平次はそれつきり縁側へ出てしまひました。十萬兩の寶搜しよりも、朝顔の苗^{なへ}の方が大事だつたのです。

二

「親分、だから言はねエこつちやねエ」

ガラツ八の八五郎が飛込んで來たのはその翌る朝。

「何んだつて腹を立てて居るんだ。俺は文句なんか言はれる覚えはないぜ、八」

平次は機嫌の好い寢起の顔を狭い庭から持つて來ました。

「親分が御輿みこしをあげないから、到頭人ひとしに死がありましたぜ」

「誰が死んだんだ」

「上總屋の甥の重三郎ですよ。その死にやうが大變なんで、行つ

て見て下さいよ、親分」

「よしッ、それぢや出かけよう」

「まご／＼して居ると、市ヶ谷の富藏親分が、誰^{たれかれ}彼^{かれ}の見境もなく縛つてしまひますよ」

「縛りたきや縛らせて置くが宜い」

さう言ひ乍らも、事件が思ひの外の重大性を持つて居さうなのが平次の岡つ引本能を鼓舞^{こぶ}します。

飯田橋中坂下の大地主、上總屋に駆け付けた時は、家の中はまだゴツタ返して居りました。

「お、錢形の」

一番早く見付けたのは、山の手で顔を賣つた御用聞、市ヶ谷の

富藏です。中年者の強^{した}かな顔には、さり氣ないうちに敵意が燃えて、出来ることなら平次を一步も中へは入れ度くない様子でした。

「市ヶ谷の親分、何にか大變なことがあつたんだつてね」

「まア、見てくれ、白^{しろねずみ}鼠^{ます}が枡^{ます}落^{おと}しに掛つたやうなものさ、

死んだ上總屋の主人も、飛んだ人が悪いよ」

富藏はそれでも案内顔に先に立つてくれます。

家の中をザツと見て、平次も胸を悪くしました。よくも斯う滅茶々に叩きこはしたと思ふほど何も彼も原形を留めません。床も天井も引剥^{ひきはが}したまゝ、壁は落され、爐^ろの灰は掻き廻され、戸棚も箆^{たんす}も引つくり返して、千兩箱の行方を搜した様子です。

ジロジロ四方^{あたり}から見て居る不安な眼差の中を、富藏は裏の物置

の蔭に案内しました。其處には稻荷いなりの祠ほくらがあつて、その祠の後ろ——崖がけへ横に掘つたお狐の穴とも思へるのが、入口を組み上げた材木と巨大な石が崩れ落ちて、若い男を一人、蟲のやうに押し潰つぶして居るではありませんか。

出入りの者や、番頭手代達の手で、崩れた材木と石を一應取片付け、死體を引出して筵むしろをかけたばかりのところ。

「これだ」

富藏はそれを指して、酢っぱい顔をするのです。

「此穴の中に金があると思つたんだね」

平次は眞つ暗な穴を覗きました。

「狐の穴の中に千兩箱を隠すのは思ひつきさ。盗る氣で入つた者

が材木と石に押し潰されたんだからこいつは天罰^{てんばつ}とでも思はな
きやなるまい」

と富藏。

「天罰にしちや手巖^{てきび}しいね」

「天罰でなきや、下手人はお狐か、死んだ先代の主人だ。錢形の
親分が夫婦づれで來ても、こいつは縛れつこはねエ」

市ヶ谷の富藏は少し皮肉な調子で、ニヤリと平次を見るのです。

「成程、金を穴の中に隠して、入口へ危い仕掛をして置くのは、
ありさうな事だが、——本當に中に金があるのかな」

平次は崩れた入口から、中腰になつて穴の中へ入つて行くので
す。

「親分、危ないぢやありませんか」

ガラツ八は後ろからその袂を押へました。

「狐が噛み付くとも思ふのかい」

「狐は心配ないが、また崩れたら何うするんです」

「一度崩れたんだもの、もう大丈夫さ。仕掛は種切れだよ。そん

な心配するより蠟燭ろうそくを持つて來てくれ。提灯には及ばねエよ、

中は狭い上に浅い様子だ」

平次はそんな事を言ひ乍ら、恐ろしく念入りに穴の入口を調べ始めました。

「へエ、親分蠟燭」

裸蠟燭を二本、灯をつけたまゝ持つて來たのを受取つて、平次

はもう一度穴の中へ潜りましたが、やがて尻の方から出て來たのを見ると、失望の色が蔽^{おほ}ふべくもありません。

「どうした、錢形の」

富藏もキナ臭い鼻を持出しました。

「千兩箱は愚^{おろ}か、ろくなお賽^{さい}錢^{せん}もないよ」

平次は泥だらけになつた着物を拂ひ乍ら、苦笑ひをしてをります。

「それぢや、親分」

ガラツ八もなにかつまゝれたやうな心持でした。

「中は恐ろしく狭い上に、苔^{こけ}で一パイさ、千兩箱なんか隠せる場所ぢやねエ。それに、穴^{あな}守^{もり}のお狐もさう言つて居たよ。生れて

まだ千兩箱と鼠の天プラにはお目に掛つたことはないつてね」

「親分？」

「解つたよ八。お前は、金を隠してゐない場所に、危ない仕掛をしたのがをかしいつて言ふつもりだらう。その通りさ、この穴の中に千兩箱が一束もあつた日にや、物事が素直に運び過ぎるよ」
平次はそんな無駄を言ひ乍らも、忙しく其邊を捜し廻つて居りました。

三

「市ヶ谷の兄哥あにい、この仕掛は古いものぢやないぜ」

平次は落散る材木や、それを釣った縄切等を丁寧に調べました。
「どうせ新しいものに決つて居るだらうよ。東照權現様江戸御入
府前からあるわけはねエ」

富藏は一向氣の乗らない様子です。

「それにしても新らし過ぎるよ。——死んだ主人の音次郎は三月
前から寢て居たつて言ふが、この仕掛を拵こぎへたのは、どんなに間
違つても、十日より前ぢやねエ」

「？」

「この仕掛をしてから雨が一度も降らなかつた。その證據は縄が
眞新らしくつて、石も木も上から流れて來る泥を受けた様子はね

エ」

平次の言葉の意味の恐ろしさが解ると、皆んな黙り込んでしまひました。三日前から寝て居た主人の作つたものでないとする、この仕掛の意味は非常に深刻なものになります。

「それに、重三郎が穴へ入るつもりで、中腰になつて、狭い入口を半分ほど入つた時、綱か何にか引いて、仕掛の石と材木を落したんだ。こんな器用なことは、狐や亡者まうじやに出来ることぢやねエ」
錢形平次の論告は、何の憚はづかるところもなく、誰の抗辯も許さずに、遠慮なく皆んなの耳に入つて行くのです。

「で、何うしようと言ふのだ、錢形の」

富藏は少し我を折りました。

「一と通り皆んなに逢つて見よう。千兩箱が出るか、下手人が出

るか、それからだ」

平次は自分へ言ひ聽かせるやうに、斯^かう言つたきり、黙つて眼でガラツ八に指圖をします。

「此處へ呼んで來ませうか」

「うん、屍體の前が宜からう。一人づつ呼んで來るが宜い」

「へエ——」

ガラツ八は飛んで行つたと思ふと、第一番に先づ大番頭の和七を、襟^{えりがみ}髪を掴まないばかりに引つ立てて來ました。

「親分さん方、御苦勞様でございます」

物馴れた五十前後の男、彈力も圭^{けい}角^{かく}も失つてしまつた、忍從そのもののやうな典型的な番頭です。

「番頭さんかい、——お前さんが店の支配をしてゐるなら、主人が金を何處へ隠して置くか見當くらゐは付いて居るだらう」

平次はいきなり突つ込んで行きました。

「へエー、それが、その、私の口からは申上げにくいことで御座いますが、一風變つた御主人で、その日の勘定から、帳尻は私にさせますが、纏まとまつた現金は、何處へやりますことやら、ツヒぞ見たことも御座いません」

そんな事があり得るだらうか、と言つたやうな平次の顔を見乍ら和七は一生懸命辯解に努つとめるのです。

「それで商賣の方はうまく行つてゐるんだね」

「へエ、それはもう」

「お前さんはこの店に幾年居るんだ」

「足掛け三年になりますが一——」

「それで支配人といふわけか、前の大番頭はどうしたんだ」

「不都合なことがあつて、身を退^ひいたさうで御座います。尤もその方は二年くらゐしか居なかつたやうで」

「此家は番頭が長く勤まらないのだね」

平次は妙なところに氣が付きしました。

「そんな事も御座いけません。現に仙之助などは、七年も勤めて居るさうで一——」

「大番頭だけ居るんだね」

「——」

和七は氣拙きまづさうに黙り込んでしまひます。

「ところで、上總屋の身上はどれほどあるだらう。支配人のお前に見當が付かないことはあるまいが——」

「それが、その、——地所と貸金では差引勘定借りの方が多くなります。世間の評判通り、何萬兩といふ金を隠してあれば別ですが」

世間の噂では——上總屋の土藏の中は小判が一パイ。それを泥棒に狙はせないために、入口の方へは何千貫とも知れぬ青錢と鏹び

錢たせんとを入れて置くとか、土藏三戸前の繩張りの内側は、こと／＼悉く金

藏になつて居て、何萬兩とも知れぬ大判小判が入つて居ると言はれて居りますが、三つの土藏は主人が死ぬと同時に、たつた一人

残された娘お染の前も憚はづからず、親類と雇人が集つて、滅茶々にかき廻され、床も天井も腰張りも、無残に引き剥がされてしまひましたが、大判小判は愚おろか、鑢びたせん錢一枚も出ては來なかつたのです。

四

次に引張り出されたのは、死んだ主人音次郎の弟で、居候並に扱はれてゐる音松といふ中老人でした。若い時はいくらか様子がよかつたらしく、放はうらつ埒ちに身を持崩した末五十過ぎてから兄の家に轉げ込み、障子も張れば便所の掃除さうぢもすると言つた、恐ろしく

氣の軽い男で、鼻唄交りにその日くを暮してゐる札付の放浪^{ボヘミア}者^ンでした。

「兄は何萬といふ金を溜め込んでゐるに違ひありませんよ。公儀御用を承はつて日光山の御修^{しうふく}覆まで引受けたこともある男ですもの」

「それを何處に隠してあるんだ」

平次は少し焦^じれ込みました。このニヒリストは、話し相手を焦らすのを、話術の玄妙と心得て居る質の男です。

「隠した場所が判つて居れば、今頃まで放つて置くものですか。

あの支配人の和七が一番先に取^も込みますよ。尤も私^とだつて負けちゃ居ませんがね、へつく」

斯^かう言つた調子の男は、平次の忍耐力でも長くは付き合ひきれません。

三番目に姪^{めひ}のお今、——姪と言つても恐ろしく遠い姪で、親類書に載^のる顔ではありません。

「お前の知つてゐるだけの事を話してくれ」

平次はこの賢くないらしい娘からは、あまり大したことは期待しませんでした。二十三にもなるでせう。丸^ぼちやの可愛らしい娘ですが、笑つても、物を言つても、無智な愛嬌がこぼれさうで、これも付き合ひきれないところがあります。

金があるかないかは素より知らず、此家に來てから五年になるが「ろくなお小遣^{こづかひ}も貰はなかつた」と少し怨^あんずる色があります。

番頭の仙之助は二三日前に平次が逢つたばかり、ひどく興奮して居りますが、言ふことはハキハキして、何を措おいても死んだ主人の隠した何萬兩の大金を、一番先に手に入れることに骨を折つて居る様子です。

「親分さん、お願いでございます。金が出て來なかつた日には、この家は立つて行きません」

半ば絶望し乍らも、平次の叡智えいちに縋すがり付かうとしてゐるのが、痛々しいほどよく解ります。

「お前は、お染さんと何にか約束でもあるのかい」

平次は思ひも寄らぬことをズバリと言ひました。

「飛んでもない、親分」

愕然^{がくぜん}

として舉げた仙之助の顔は、まだ去りもやらず、其場の様子を見て居るお今の顔とハタと逢つたのです。

「大層肩を入れるやうだが」

「お嬢様には、お武家方から養子が來ることに話が纏^{まと}まつて居りますが、金の隠した場所が解らないと、その話の進めやうがありません」

「それはお染も承知か」

「へエ——」

仙之助の一生懸命さには、何にか仔細^{しさい}がありさうですが、それは平次の慧眼にも容易に解りません。

最後に呼出されたのは娘のお染でした。

「お前はお染さんかい」

物置の前、重三郎の死骸の側へ呼出すにしては、これはあまりに痛々しい姿でした。精々十八九にしか見えない若々しさも、生得の麗質が年齢を刻む由もないほど玲瓏れいろうとして居るためせう。「美しい」といつたやうな、通り一ぺんの言葉で、これは形容される娘ではありません。人によつては此病的にさへ見えるなやかさを、醜みにくいと見るかもしれませんが、人間の血肉を盛つた存在で、こんな不思議な魅力を持ったのを、平次はまだ見たこともないやうな氣がするのです。

「お嬢さん、私の訊くことに、包み隠さず應こたへて下さいよ」
「ハイ」

お染は素直にうなづきました。さう言はなくなつて此娘に嘘も掛引もあらうとは、平次も最初から思つても見なかつたのでした。「亡くなつた父さんが、何處へ金を隠したか、お前さんなら見當くらゐは付く筈だと思ふが——」

「私は、あの、そんなお金は、出て來ない方が宜いと思ひます」
お染は少し涙含んで居りました。奉公人や親類方が、隠された金を探し廻つて、氣違ひ染みた打ちこはしを初めるのを、お染はどんなに苦々しい心持で見えてゐたことでせう。

「すると、お氣の毒だが上總屋の身しんしやう上は持たないさうですよ」
「それでも構ひません」

「お嬢さんは、お武家方から來るといふ、養子が嫌なのですね」

「」

お染は黙つてしまひました。

「死んだ重三郎は、店の者の受けはどうでした」

「さア、私には」

お染は内氣らしく尻ごみをします。

「お嬢さんは仙之助をどう思ひます」

黙つて顔を染めた娘の顔から平次は何も彼も見抜いた様子です。

五

「さア解らねエ——親分、これは一體何處に眼鼻があるんでせう」

ガラツ八は四方あたり構はず張り上げました。

「何萬兩かの金は何處かに隠されて居るのさ。それを皆んなで、一生懸命捜し廻つて居るんだ。命がけの寶探しだよ」

「へエ——」

「殺された重三郎の身體を見よう」

平次はガラツ八と富藏を促うながして重三郎の死骸から筵むしろを剥ぎました。

「おや？」

ガラツ八はギョツとした様子で重三郎の傷を眺めて居ります。

「氣が付いたか、八」

「こいつは、上から落ちた材木や石に打たれて死んだんぢやあり

ませんね」

「その通りさ。材木や石に打たれて死んだ様に見せかけて居るが、重三郎の頭を打ったのは、極くごく小さい石だ。——人間を丸ごと押し潰すやうな材木や石ぢやないよ。第一そんな重いものを穴の上へ持上げるのは、一人や二人の力では出来ない。それに、あの仕掛はツイ五日か三日前に拵しこぎへたものだ」

平次の言葉は至つて印象的ですが、恐ろしい疑問を次から次へと投げかけて行きます。

「？」

「重三郎は寶搜しのつもりで穴へ入つて行つた。——穴は狭くて身體を返すわけには行かないから、出る時は尻から出て來た。——

——大骨折で首を出した時、誰か穴の外に待ち構へて居て、手頃の石で頭を打ち割つたのさ。上から落ちた石が、あんなに都合よく頭の上へ来るものか」

「すると？」

「企たくらみは思つたより深い。重三郎の懷中や袖の中をもう少し念入りに搜して見るが宜い」

平次とガラツ八は氣の進まないらしい富藏に手傳はせて、死骸の身體を念入りに調べて行きました。

「こんなものが袂の中にありましたよ、親分」

「何んだ、大福帳の端つこを鋏はさみで切つたのぢやないか、——いなりのうしろ、あなのなか——と書いてあるのか、これは誰の字だ」

平次はまだ其邊にうろ／＼してゐる大番頭の和七を呼びました。

「――」

「――」

和七の表情は急に硬こばります。

「この右下がりの筆癖ふでぐせは、お前に解らない筈はあるまい」

「亡くなつた主人の字にも似て居りますが――」

「まだ外にこんな字を書く者があるだらう」

「へエ――」

「誰だ」

平次の問ひは假借かしゃくしませんでした。

「仙之助が主人を眞似て、右の肩下がりの字を書きます」

和七はさう言ふのが精一杯でした。

「親分」

ガラツ八と富藏は顔を見合せました。合圖一つで、飛出して仙之助を縛り兼ねまじき氣色です。平次は併しかし、それを眼で押へて、それ以上追及しさうありません。

その日の調べは、それでをは了りました。寶探しの深刻な競争は、まだ續いて居る様子ですが、平次はそんなものには眼もくれず、和七にいろ／＼の帳面を出させて解らない乍らも一應眼を通し、それから大きな取引先を二三軒訪ねて、上總屋の財政状態を、出来るだけ調べました。

それから三日目。

「親分、大變ですぜ」

上總屋を見張らせて居たガラツ八が、少し取りのぼせた形で飛び込んで來ました。

「何をあわててゐるんだ、八」

「音松が昨夜から歸りませんよ」

「音松？」

「死んだ主人の弟で、あの野^の幫^{だい}間^こ見たいな野郎ですよ」

「何處へ行つたんだ」

「町内の湯へ行くつて出たつきりですつて」

「それは變だね、行つて見ようか」

平次とガラツ八は時を移さず飛びました。飯田町の上^{かづ}總^さ屋^やへ行

つて見ると、音松の行方不明などは忘れたやうに、奉公人も親類も、相變らず寶搜しに夢中です。

「音松さんが、昨夜から歸らないさうぢやないか」

「へエー、そんな事は滅多にありませんが、また昔の病ひが出たのかも解りませんよ」

番頭の和七は心得顔でした。放埒者はうらつもので鳴らした音松の惡名は、和七も悉く承知だつたのです。

「どんな様子で出かけたんだ」

「まだ宵のうちでした、手拭をブラ下げて」

「下駄を穿はいてかい」

「草履ざうりを穿いて、何んか變な道具を懷ろへ入れて行きましたよ」

小僧の直吉が口を挟みました。

「くは かま 鍬や鎌ぢやあるまいな」

と平次。

「そんな大きなものぢやありません」

「道具箱を見てくれ、何になくなつたものがないか」

「――」

和七は黙つて物置へ行きましたが、暫らく経つてから、

「おほのみ 大鑿が一挺見えませんよ、親分」

「よし、そんな事だらうと思つたよ」

平次はいきなり帳場へ行くと、此間見たばかりの大福帳仕入帳などをバラバラ繰つて行きました。

「これだ。八」

指さしたのは、鋏で紙を切取つた跡が二ヶ所。はさみ

「そいつは何んです、親分」

八五郎はその意味が呑込めません。

「この近くに上總屋の寮か、隠居所がないか訊いてくれ」

「へエ」

八五郎は飛んで行きましたが、奉公人達二三人に逢つて引返すと、

「寮も隠居所もないが、神樂坂裏に久しく明いて居る貸家が一軒あるさうですよ」

こんな事を聽込んで來ました。

「よし、其處へ行かう。小僧を一人借りて來い」

小僧の直吉を先に立てて、平次と八五郎は早速神樂坂に向ひました。

「此處ですよ、親分」

直吉が示したのは町裏の藪の中に置き忘れられたやうな空家が一軒。裏へ廻ると、雨戸は一枚外したまゝ。其處からいきなり飛込んだ八五郎は、

「あツ、大變ツ」

四方構はず聲を張り上げます。

「音松が殺されて居るんだらう。押入か床ゆかした下へ首を突つ込んで」
平次は靜かに外から應じました。

「どうしてそれを？」

「懷ろの中には、古帳面ふるちやうめんから切抜いた紙に、右肩下りの字

で、——神樂坂の貸家——とか何んとか書いたのが入つて居る筈
さ」

平次の言葉は恐ろしいほどの中しました。

音松は空家の奥の六疊の押入に首を突つ込み、床板を剥はがしたまゝ、
背中からあひくち首を突つ立てられてこと切れて居たのです。

「親分、あの押入の床下に、千兩箱がありやしませんか」

「馬鹿ツ、誰がこんなところに千兩箱なんか持込むものか。あれ
ば精々ねずみくそ鼠の糞くらゐのものだ。それよりは、音松の身體を捜せ」

「帳面の紙片なんかありやしませんよ」

「曲者は今度は持つて行つたんだ。よし／＼證據は一つで澤山だ。ところで小僧さん」

「へエ——」

不意に平次に聲をかけられて案内の小僧は飛上がる程驚きました。

「驚くことはない、——これだけ教へてくれ。昨夜音松が出た後か先に、飯田町の家を出たのは誰と誰だ」

「皆んな出ましたよ」

直吉の返事は想像を飛とび離はなれます。

「皆んなといふと？」

「番頭さんは夕方から日本橋の御親類へ、仙之助さんは音松さん

の出た直ぐ後で、矢張り町内の湯へ行つたやうです」

「お嬢さんは？」

「お嬢さんは何處へも出ません」

「お今は？」

「お今さんも家に居りました。ひどく頭痛づつうがするつて、御飯も食べずに、自分の部屋へ入つて休んだやうです」

「それから？」

「それつきりですよ」

「親分、縛つてしまひませうか」

ガラツ八は我慢のならぬ様子でした。

「誰を？」

「仙之助の野郎をですよ」

「もう少し待ちな——今度は仙之助が殺される番だ」

「へエ——」

ガラツ八には何が何やら解りません。平次の言葉はあまりにも奇つ怪だつたのです。

「それより、昨夜の和七と仙之助の足取りを調べて來い。時刻を訊き漏しもらちやならねえよ」

「親分は？」

「俺は上總屋へ行く。音松を刺さしたヒ首が、何處かに隠してある筈だ。捨てるにしちや下手人は惻口過ぎる。それから、和七と仙之助の外に、昨夜そつと脱出した奴があるかも知らない」

平次は直吉と一緒に上總屋へ引返して行きます。

六

平次が上總屋^{かづさや}へ歸つて來ると、此方にも大變な騒ぎがありました。

「親分さん、大變ですよ。お染さんが」

お今は持前の愛嬌を何處かへ置き忘れてもしたやうに、アタフタと平次を迎へます。

「何うしたんだ」

「殺されかけたんです」

「えッ」

「朝のおみおつけに何にか入つて居ました。でも、お染さんは食の細い人だから、いくらも喰べなかつたんで助かりました」

平次はその話を半分聽いて、お染の部屋へ飛込みました。町内の本道が、玉子の白味しろみや油を吞ませて大方は吐はかせたさうで、今は疲勞ひらうのために、うつら／＼して居ります。

「お、錢形の親分」

本道は坊主頭をふり向けました。

「何んだらう、先生」

「石見銀山いはみかな。——お嬢さんの味噌汁みそじるにだけ入つて居たところを見ると、企たくらんだ仕事だよ、親分」

「誰がその味噌汁を拵へたんだ」

と平次。

「お勝手に、皆んなのと一緒に鎌が拵へますよ。尤もお染さんは氣分が悪いから、欲しくないって言ふのを、仙之助さんはそりや親切だから、自分でお膳まで運んで食べさせましたが――」

お今の説明には、何かしら含んだものがあります。

「仙之助は何處に居るんだ」

「市ヶ谷の親分が縛つて行きました」

大番頭の和七はおろ／＼した顔を出しました。

「たつたそれだけの事でか」

「仙之助の行李かうりの中に、石見銀山の使ひ残り、少し血の附いた

ヒ首あひくちがありました。へエ、今聴くと音松さんが、神樂坂の空家で殺されたさうで、本當に怖ろしいことで御座います」

和七は心なしか、ブルブル顫ふるへて居る様子です。

「市ヶ谷の親分が仙之助を縛つて行くのも無理はないが、そいつは少し早まったかもしれないよ。使ひ残りの毒や、血染のヒ首などは行李の中へ入れてしまつて置くものぢやねエ」

「左様で御座います、親分」

この無能な大番頭からは、平次は何の反應も求められません。この騒ぎの中へ、八五郎が歸つて來ました。

「親分、二軒共違ひなく行つて居ますよ」

「で？」

「時刻も合つて居るやうです。——尤も、神樂坂へ廻つて、待つてなんか居ずに音松を刺して、直ぐ歸つて来るやうな手順に行けば別だが——」

和七と仙之助は一應不在證明アリバイを持つて居るやうですが、それが完全とは言ひきれません。

「よし／＼俺には段々解つて来るよ。そこで番頭さん、今晚奉公人も親類の方も、皆んな集まつて貰つて下さい。あつしから話し度いことがあるから」

「へエー」

「八は番所へ行つて、仙之助を貰つて来てくれ。たつた一と晩のことだから、何とか話がつくだらう。平次が見張つて居て、明日

は間違ひなくお返し致しますつて言や宜い」

「へエー」

八五郎を出してやると、平次はもう一度念入りに上總屋の外廻りを調べました。

七

その晩、上總屋の奥に集まつたのは、家族、奉公人、近い親類などざつと十七八人。平次はその緊きんちやう張した顔を見廻して、靜かに語り出しました。

八疊と六疊を打ち抜いて、しよくだい燭臺が四つ、平次の前にはお染

とお今。その横には和七と仙之助。親類方はその後ろへ、奉公人はその横に並びました。

「さて、皆の衆。こんな事を言ふと驚くかも知れないが、言はなきや何時までも皆んなの迷ひが晴れまい。實は——」

平次は口を切つて、一座を見渡しました。

「——」

緊張しきつた顔と顔、——多分平次の口から、二人まで人を殺した恐ろしい下手人げしゆにんの名を聞けるのかも知れないと思つて居る様子です。

「驚いてはいけない。飯田町の上總屋、——神田から番町へかけても、並ぶ者が無いと言はれた大分限だいぶんげんの上總屋には、氣の毒な

ことに一文の金もなかったのだ」

「――」

水をブツ掛けたやうな恐怖と驚愕、一座は顔を見合せました。

「少くて三萬兩、五萬兩、どうかしたら十萬兩もあるだらうと思はせたのは、上總屋の主人の腕だ。まことは過る年すぐの日光ごしうの御修ふく覆したうけおひで下受請の手違ひから、工事のやり直しをしたために、十萬兩からの出費で、上總屋は一文なしになつてしまつた」

「――」

「商人は信用を落しては一日も立ち行かない。上總屋はその祕密が知れさうになると番頭を代へ、大金を何處かに隠してあると見せかけ、世間にもさう思はせて、苦しい店を今日迄張つて來たの

だ。死んだ後でいくら探したところで、十兩と纏まとまつた金が出て来るわけではない。皆んなも、もう床を剥いだり、壁を崩したりするやうな浅あさましい事は止した方が宜い。——この平次が、三日がかりで帳面を調べた上、取引先を一軒々々訊いて廻つたんだから、これは間違ひはない。お氣の毒だが、上總屋に残るのは、少なからぬ借金だけだ」

恐ろしい失望が、十七八人の顔を暗くしましたが、その間にたつた二人、厄介な因縁いんねんから解放されて、ホツとした顔を見合せた者があります。

「お嬢様」

仙之助は和七を隔へだてて、お染に聲を掛けました。

「私は、私は――」

お染はさすがに『私は嬉しい』とは言ひ兼ねましたが、仙之助を顧み^{かへり}たその明るい表情には、幸福感が溢^{あふ}れて居ります。

「御安心なさいまし、お嬢様。お店は私が宜いやうにいたします。一生懸命になつたなら、昔ほどではなくとも、お嬢様をお困らせするやうなことはないでせう」

上總屋が一文なしと決れば、武家方の養子は破談になるのに決つて居ります。今までお染のために寶探しに熱をあげて居た仙之助は寶がないと決れば、さすがにこみ上げて来る嬉しさをどうすることも出来なかつたのでせう。

「仙之助はお染と一緒になつて、上總屋の身上を盛り返して行く

が宜い。——誰もそれに不服はあるまい」

平次のさう言ふ聲も嬉しさうでした。が、事件がまだ片付いたわけではありません。二人まで大の男を殺した下手人は解つて居なかつたのです。

八

その晩、通り魔のやうな影が一つ、お染の部屋へスルリと滑り込みました。

有明の行燈を吹消して、逆手^{さかて}に持ったヒ首^{あひくち}が、お染の寢首へ

「御用だツ」

曲者のヒ首を持った手は無手むずと掴つかまりました。逆ぎやくに捻ひねつて膝の下に敷くと、

「八、灯りだ」

平次の聲です。

「おい」

手燭を持つて、六法を踏むやうに飛んで來たガラツ八。平次の膝の下の曲者の顔を見て、さすがに仰天しました。

「こいつが曲者ですかい、親分」

「見るが宜い。——持前の愛嬌などは何處にもない、夜叉やしやのやうな女ぢやないか——あツ舌を噛み切りやがつた」

平次の膝の下で、殺人鬼のお今は、舌を噛み切つたのです。怨
 みと憤りいきどほに燃える顔は歪ゆがんで、キリキリと結んだ唇からは、絲を
 引いて血が流れます。

×

×

×

事件が済んで了つてから、ガラツ八の燃える好奇心に對して、
 平次は斯かう言ひます。

「重三郎は主人の甥をひで、音松は主人の弟だ。この二人とお染を殺
 せば、萬といふ金が遠縁乍ら姪めひの自分へ入つて來るとお今は考へ
 たのさ。重三郎を殺したのが、力の要る仕事のやうに思はせて、
 その實非力な仕業と解つて、俺は下手人は女ぢやあるまいかと思
 つたよ」

「へエ——」

「帳面の紙を切つて、重三郎と音松をおびき出したのは、一應仙之助の仕業のやうに見えたが、右肩下がりの字なんか誰でも眞似られるよ。——それから、音松を殺した晩は、頭痛がすると言つて、早くから自分の部屋に籠り、そつと窓から脱け出してゐる」

「なアる——」

「石見銀山と血染のいはみヒ首あひくちを、仙之助の行李かうりに隠したのは、賢いやうでも女の猿智慧さ。あんな事をしたので、いよく俺は仙之助が潔けつぱく白だと思つたよ。お今は自分の思ふ通りにならない仙之助が憎らしくてならなかつたんだ」

「——」

「上總屋には十兩の金もないとわかると、今度は仙之助と一緒に
なりさうなお染が憎くなつた。お今は最初此家を乗取つて仙之助
と一緒になるつもりだつたかも知れない——兎も角、昨夜はつき
りお染と仙之助の氣持が解つて、急にお染を殺す氣になつたのさ。
あの愛嬌者のお今の顔が急に怖こはくなつてお染を睨んで居るのが容
易でなかつたので、俺はお染の代りにあの部屋で待つて居る氣に
なつたのさ」

「へエー、驚いたことだね、親分」

「尤もつとも、お今のやうなのばかりぢやない。女の中には、何萬兩の
金がないと知れて、反かへつて喜ぶお染のやうなのもあるよ。仙之助
も仕合せ者さ」

「ヘツ」

「妬^やなく。そのうちにお前にも、良いのを見付けてやるよ」
平次はさう言つて面白さうに笑ふのです。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第二十巻 狐の嫁入」同光社磯部書房
1953（昭和28）年11月15日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1940（昭和15）年6月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2016年7月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

十萬兩の行方

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>